

どうぞよろしくお願ひいたします。皆さんこんにちは平井登威といいます。僕たちは NPO で精神疾患を持つ子供若者支援をやってるんですけど僕の方からは 25 歳以下担当者 200 人前後ぐらいと出会って感じていることを話させていただきます。

あくまでもデータではなかったりとか創業期の本当に小さな NPO の実践の話なので、どこが参考になるかわかんないんですけどお話させていただけたらと思います。途中でも話んですけど最初に伝えておきたいのが僕たちは精神疾患の親を持つ子供若者支援の実際をしているのですが、それを言うと、ヤングケアラー支援ってしてるんですねって結構言われたりします。でも、それとこれとはまた別の話だっていうところを最初にお伝えできたらなと思ってます。

まず僕の自己紹介をさせていただきます。今関西大学の 4 年生で去年の 4 月から休学して NPO を立ち上げました。ここまでずっとサッカーやってもう本当にサッカーしかやってなくて勉強全くやってこなくて、指定校推薦で全く福祉と関係ない学部に入っちゃって結構地獄みたいな感じなんですけど、頑張って単位は取っているという感じです。僕自身も当事者で幼稚園年長のときに父親がうつ病になって虐待だったりとかヤングケアラーで心のケアみたいな、情緒的なケアっていうのを経験した原体験があります。ただ僕が今こういう活動やったりもしているので自分の体験ってよりかはもうちょっと多くの子供たちと出会って感じていることをお話できたらなというふうに思っています。

団体はそんなに話すことはないんですけど学生団体としては大学入学した年の冬に学生団体を立ち上げて、立ち上げ当初はほとんど活動しなかったんですけどそこから 1 年ぐらい経ってしっかり活動し始めて去年の 5 月にしっかり中途半端になってはいけないよねっていうところで法人化してます。僕たちは精神疾患の持つ子供若者支援の土壌を作るチャレンジをしている NPO です。

学生団体から組織への移行のタイミングでメンバー編成も今いろいろ変えたりして途中なんですけど、ソーシャルワーカーさんを採用したりだったりとか、また PR の人とかでもいろんな人に入ってもらってるっていう感じです。

役員とかに関しても人事変更とかがあったりするのでそのタイミングで児童精神科医の人だったりとかに入ってもらっていただくっていうところを予定しているという感じです。僕たちが取り組んでる社会問題について簡単にバーッと話させていただくんですけど、精神疾患の持つ

子供って他の子供と比べて自身の罹患率が 2.5 倍高いっていうふうに言われています。そういった負の連鎖みたいなところ止めたいっていうふうに思っています。最初にしっかり伝えておきたいのは、親が悪いって言いたいわけではなく、多くの場合は社会側に問題があるんじゃないかっていうふうに思ってこの活動をしています。

実際そのメンタルヘルスだけへの影響だけじゃなくて小児期逆境体験みたいな研究があったりするんですけど心身の健康だったりとか、社会生活への支障が出る確率も高いっていうふうに言われていたりするっていうところでこれも知っていただけたら嬉しいなというふうに思っています。

そういった子供たちってすごい少ないんじゃないかって言われたりするんですけど日本ではまだまだ調査とかも少ないんですけどイギリスとかオーストラリアとかドイツとかスウェーデンとかいろいろ進んでるところがあってそこでは子供全体の 15 から 23%が親が精神疾患の状態にあるっていうふうに言われていて決して少なくないっていう数になっています。

ということはどれだけ多くの子供たちが見えない存在となっているのかっていうところが、見てわかるんじゃないかなというふうに思って、もちろん親が精神疾患だからといって必ず悪い状況にいるってわけでもないっていうところも前提としてお伝えできたらなというふうには思っています。

そんな状態があるのにも関わらず、現在日本において、この精神疾患の親を持つ子供若者を直接的に対象としたあの組織的な支援をしている団体って今日本においてほとんどなくて僕たちはそこにチャレンジしていこうっていうところでチャレンジしています。本当にこちら辺はすごく僕も最初にこの領域に飛び込んできたときびっくりしたんですけどもちろん何か貧困とか虐待とか、何かそういったヤングケアラーとかそういった文脈で個々の支援はあったりすると思うんですけど親が精神疾患の子供っていうところに焦点合った団体がないっていうところでは実際問題あるのかなというふうに思っています。

海外とかを見渡してみると親が精神疾患の子供の支援というのはすごくいろいろあってこの左下のマスコロスバーンっていう団体とかは 2 週間前に日本にこの創設者の人が来日されてたんですけど 1 週間僕も同行させてもらっていろいろ話させてもらったんですけど、この創設者の方も 18 のときになんか同じ立場の人と出会って立ち上げてそれが今 18 年目ぐ

らしいの団体で今3億ぐらいの規模で精神疾患を持つ子供若者支援をやっててすごく衝撃的でした。

なんかそこら辺は一旦置いて次に僕たちがなんでその親が精神疾患の子供若者が高確率で自身のメンタルヘルスに不調を抱えてしまうのかみたいなどころにおいて複雑な課題の中で僕たちの中で二つの課題設定をしています。

一点目がやっぱり当事者の子供たちが見えない存在となっていることによってなかなか支援に繋がらないってところがあるのかなというふうに思っていて、そもそもまず当事者自身が自身の家庭を客観視して自覚する言語化するっていうことが難しいってのはやっぱり1個大きな理由かなというふうに思います。

あともう一点がやっぱり助けてってすごく言うのって難しいなと思っていて、例えば僕たちが取り組んでその精神疾患を持つ子供とかの問題だったら、精神疾患ってすごい偏見もあったりすると思うんですけど友達がうつ病のことばかりしてたら自分の親がうつ病っていうことを伝えたら自分の親を馬鹿にされてしまうんじゃないかその子供の自分を馬鹿にされるんじゃないかっていうところで、話すことが難しかったりだったりとか、何か相談したら親だから親孝行しないといけないなんて親の悪口言うんだよって言われてしまうとか、何かそういったところからなかなか助けてっていうのがあったりだったりとか、相談窓口とかってすごく大事だと思うんですけどやっぱりどうしても待つっていうことになってしまっていてそういった自覚と当事者の自覚言語化助けてっていう勇気を前提とされた支援というのはなかなか当事者自身が自分から繋がっていくっていうことは難しいんじゃないかっていうところの課題感を感じています。もう1個はやっぱり当事者のこのグレイゾーンの話にも繋がってくると思うんですけど、この若者をサポートする社会資源はほとんどないってところやっぱあるのかなというふうに思っていて、ヤングケアラーですごい増えているってところあるんですけどそもそも資金面のハードルの高さっていうのはすごい取り組みたい人たちがいっぱいいると思うんですけどなかなか資本主義の仕組みの中での解決が難しい領域だったりもするのでやっぱり資金面のハードルの高さは1個大きな理由なのかなっていうところは思っています。もう1個の方がすごく大事だなというふうに思ってるんですけど、虐待とか貧困とかヤングケアラー、などを僕たちは二次的な困難と言ってるんですけど、そういった状態になるまで名前がつくまで支援を受けることが難しいってところやっぱ大きな問題なんじゃないかというふうに思っています。

本当に名前のないフェーズってその一歩手前にある状況例えば親が精神疾患で家庭内ちょっといざこざがあるみたいな状況ってもしかしたら支援を必要としている人たちだったりとかそこに何か適切な第三者が入ったら、その関係性が向上して大きな問題にならなかったけれどもみたいなフェーズだと思うんですけど、何かそこに対する支援ってまだまだ少ないなというふうに思っています。

ヤングケアラーとの違いって言うところだと、僕が最初に言ったただ精神疾患の持つ子供若者支援って言うヤングケアラー支援やってるんだねって言われると僕は危険危うさを感じて、ヤングケアラーって言う視点で見ても精神疾患の持つ子供って、その円の中のあくまで一つだし、精神疾患の持つ子供って言う円を中心に見ても、ヤングケアラーってあくまでも一部の問題なんだって言う重なる部分はあるけれども、必ずしも全部が一致しているわけではないって言うところはあると思うんですね。

てなったときにさっきのグレーゾーンの話とも結構通じるのかなというふうに思っていてこぼれ落ちてしまう子たちはかなりいるんじゃないかというふうに思っています。ヤングケアラーってすごい本当に対象が幅広い兄弟の立場だったりとか、日本語が第1言語ではない家族がいてその通訳をする子供だったりとか親の精神疾患とかおじいちゃんの介護とかいろいろあると思うんですけど対象はすごい幅広いと思うんですけど、その状態ケアっていうものはすごく狭く定義されているものだと思うのですごく対処療法的な言葉でもあると思うし、さっき言ったみたいに本当にこぼれ落ちちゃう子たちが多んじゃないかっていうふうな課題感を感じています。

そんな中で僕たちは精神疾患の親を持つ子供から、子供たち自身から相談をするっていうことも諦めようって言うところ最初のファーストステップでそれを作っていくんですけど、今後長期的に見たやっぱそこはもう諦めて、社会からどうやって子供たち早い段階で気づいて、適切なサポートを届けていくかっていうところを問いにおいて活動していこうというふうに思っています。僕たちはよく話すのはヤングケアラーってすごい支援者向けの言葉だかっていうふうに思っていて、例えば当事者があなたはヤングケアラーですかって聞かれたときに次に出てくると言っていて、ケアって何だろうとか、自分のやってることってケアって言っているのかなみたいな、イエスカノーかで判断しづらいとが出てくると思うんですね。

だからあなたはヤングケアラーですかケアって何だろうわかんないや、イエスってなかなか言えない。でも例えば親が精神疾患の子供だったら親が精神疾患ですかってそれを知ってるか知らないかの問題あると思うんですけど、イエスってすごく判断しやすいって言うのは

やっぱり実際に当事者の子たちと出会ったときに、話を聞いてるとすごく大きな1個の違いなのかなというふうに思っています。あとその支援者向けの言葉っていう言葉を使ったのは、例えば今までいい子だねとか頑張ってるねって言われた子たちに対して、ケアラーっていう眼鏡をかけてその子を見ることでこの子はもしかしたらケアをしているのかもしれないっていう視点が生まれてその支援者の視点によって子供たちのケアでそこで子供の権利が侵害されているっていうことに気づける可能性があるっていうところに関してはすごく大きな意味を持つと思うのでやっぱヤングケアラーっていうことは支援者向けの言葉としてすごく大事な言葉なんじゃないかっていうところは思っています。

あともう一点がすごいこれ言い方はすごい難しいんですけど、身体障害とか知的障害とかってすごく何て言ったんですかね医療とか福祉へのアクセスもそんな率も悪くはなかったりだったりとか外から見えやすかったりとかする。対して精神疾患とかって偏見とかもあってなかなか医療とか福祉へのアクセスも悪いみたいなのところもあって、そもそも同じヤングケアラーって定義される中でもどこに課題があるかが違うんじゃないかっていうふうに思っています。

例えば今現在その支援者の眼鏡をかけることで気づける可能性がある当事者の子たちのことを考えていくのであれば、次に出てくる問題って多分支援の質とか量とかの担保の話が結構大きな課題になってくると思うんですけど、逆に言うと、今なかなか見えづらいその見えない子供たち例えば医療とか福祉へのアクセスがまだまだ高くなって子供たちに気付けるきっかけはまだまだ少ないみたいな親が精神疾患の子供とかになって、だから、どれだけ支援メニューが拡充されても、それを使える子供たちって本当に少ないんじゃないかっていうところなのであれば、もちろん支援を作っていくことも大事だけれども、その子供たちに気づくっていうことにまずはアプローチをしていかなければいけないんじゃないかっていう、必要な視点が変わってくるんじゃないかっていうところも、ヤングケアラー広い、すごい大事な言葉だとは思いますが、そういった広いことによって見えづらい課題とかあったりするんじゃないかなっていうところで支援を考えていくにあたって、より個別具体的な話で考えていく必要があるんじゃないかなっていうふうに思っています。

例えば気づく仕組みってどういうとこなんだろうって言ったら、例えば親が病院と繋がってるんだったらその病院に受診したタイミングでその人に子供がいたらその子供に気付けるかもしれないとか、手帳の話さっきお話があったと思うんですけどそのタイミングも築け

るかもしれないしとか本当にいろんな形があると思うんですけど、今、本来仕組みがあれば築けるはずの人たちに気付いていないっていうことは、大きな問題なんじゃないか僕たちはやっぱりその実践をやっていきたいっていうところを持って今後活動していきます。

ただ何か今そういうなんかすごい社会的なインパクトみたいな話はよくするんですけど、何かそういうことを優先して地域に入っていくことで、本当に住む地域によって、こぼれ落ちちゃう子たちってかなりいるんだなってことを知って、すぐ学生団体の頃からずっとオンラインの居場所作りみたいなったりしてるんですけど、本当に岩手から鹿児島ぐらいの子たちと出会って、そういった子たち例えば僕今静岡の浜松に住んでるんですけど、静岡の浜松で1個の場所をやったらそういった子たちがこぼれ落ちてしまうみたいなどこやっぱすごくなんか僕たちはそうやってこぼれ落ちる子供たちを減らすためにやってるのに、自分たちがやることによってこれ落ちるめっちゃ増やす、みたいななんかそのジレンマ結構きつくて、オンライン上でまずは住む地域に関係のないオンライン上で居場所作りだったりとか支援の土壌を作ろうっていうところで今チャレンジをしています。

ただなんかオンラインでできることの限界の話もちょっと後でするんですけど、あったりはするっていう感じです。現在はオンライン上の居場所作りとして Slack ってチャットツールを使って居場所作りとかをやっています。個別相談とかもやったりはしてるんですけど、誰でもできるようなことやってはいるんですけど、さっき斎藤先生がああ社会的に許容されない言葉、ドロドロドロドロという言葉を使ったと思うんですけど、親マジででキモいしねみたいな本当にそういう話が出てきたりするんですけど、そういうことって友達とか先生に言ったら親のこと大切にしなきゃいけないよねみたいな話になっちゃって、すごい社会的に許容されづらいと思うんですけど、そういった言葉が安心して吐ける安心感とかすごくあったりするのかなっていうところは思っています。あとはやっぱりその自分を主語に話すことは難しいって書いてあるんですけど、これって本当にすごく大きな問題だになっていうふうに思っていて、例えばめっちゃ簡単なことと言うと、例えばお母さんが料理担当だったとしたら、お母さんが唐揚げとハンバーグどっち食べたいって言ったときにこれを自分はハンバーグ食べたいけど唐揚げって言わないとお父さんが怒るかもしれないっていうことで、自分は唐揚げって答えるみたいなそういう小さな自分を後回しにした意思決定を積み上げていくことで、なかなか自分を主語に話したいと考えたりする癖がない子たちがすごく多いっていうところ。これってすごく長期的に大きな影響が出るんじゃないかっていうふうに思っているのって、言えないとか人を頼れないとか、やっぱりそういったところに伴う課題みたいなところまでやってる子たちもかなりあったりするのかなというふうに思っています。

次のところがなんかここは僕たちも今後オンライン上での支援を今年来年度で24年度で作りたいというふうに思い、一定の型を作りたいというふうに思ってるんですけどこれから力を入れていくところでもあるんですけど、何か選択肢って今社会に何か新しいものを作らないって動きはすごく大きいと同時に、今すごいあるけれども、有効活用されてない選択肢ってかなり多くあるというふうに思って、そこには知ると選ぶと使うのハードルがある。

でもなんかそのハードルって誰かが間に入って、下げることができるよねっていうことはあると思うんですけど、僕たちはその役割を担っていく必要があるんじゃないかっていうふうに思っています。

ただオンラインの限界としてプラスの体験を増やせるかもしれないけれども、家庭に介入するみたいなマイナスを減らすみたいなのはなかなか難しいっていう限界もあるので、今後僕たちはさっきの社会が気づく仕組みを作るみたいなのところのモデル事業を作るためにも、今後は25年度からはオフラインの地域の居場所作りに入っていきたいなというふうに思っています。

これもすごく難しいなと思うところなんですけど、いろんな当事者にとって繋がりたいって思う理由の中の一つに、やっぱり年齢の近さってすごいあると思うんですよね。僕も今22だから繋がれてる子たちってすごい多くいると思うんですけど、1要素としてすごく大きくなっていうふうには思うし、それ話が、年代が近いんであったりすることもある。

でももしかしたら自分も10年後、そういう同じ状況になったら多分合わないと思うんですよね。それはしょうがないことだと思うし、一番すごい難しいなっていうふうに思うのが、1要素としてすごく大きな理由となる年齢の近さってあると思うんですけど、若さと専門性ってすごい反比例するものであるっていうことがすごく難しいなというふうに思っていて、結構そうなったときにその対立って起きがちだと思うんですけど、別に全員が同じことを一つ一つの団体とか1人でやらなくても繋がるところはここで、そこから先の専門性危うさが出てくるところからも専門性が持った人が介入すればいいよねみたいな役割分担をうまくやっていけばその繋がるハードルと、より専門的な支援のハードルって下がっていくんじゃないかみたいなのところと、僕たちだったら僕たちみたいなちょっと繋がりがやすい人と、定期的に話す中で何かこういう団体が、こういう人がいて、何か一緒に3人で話してみるみたい

なことをして3人で話すの2回やってみたら、信頼できるのは信頼できる人なんだみたいな形でちょっと相談しやすくなって次はその人と一対一で話すみたいなことが生まれたりだったりとか、やっぱりそういう関わりはすごく大事なんじゃないかなというふうに思っています。だからこそ僕も3から5年とか7年ぐらいでしっかりと組織を最初創業期頑張っって生き残れたらなんですけど生き残れるように頑張っって、そしたらもう僕も前から離れて、裏方の立場になっていけたらいいなというふうに思っていて、それは僕が前に出続けることの弊害としてそういう繋がりづらさみたいに出てくるんじゃないかっていうところを持っているから、というところがあったりします。

今、本当に最近やった活動をしっかりと広げようってし始めて今本当にラインの追加も多分この4ヶ月ぐらい結構あって今200ていうか合計200ぐらいの当事者とであってるとみないな感じです。課題感として当事者と話して感じる課題感としてやっぱりメンタルヘルスの影響はすごく大きいっていうところ、すいません時間内でパーって行くんですけど、あとはやっぱヤングケアラーとか貧困とか虐待みたいに知的な困難な状況下にある子たちもいたりする。

あともう1個はやっぱりさっきの名前のないフェーズでの支援をなかなか受けられてないことはやっぱり多いなっていうふうに思っているっていうところで、僕たちもやっぱり出会う子たちの7から8割ぐらいが初めて話すっていうところ、初めて親の精神疾患の悩みを話したっていうところで、1割ぐらいが2回目っていう話をしてくれて、1回話したから話したけど、例えば保健室の先生話したけど、親だから大切にしないといけないよねって言われて、もう話したくなくなったみたいな声を奪われたみたいなことに近いと思うんですけどやっぱりそういう経験をして話せないみたいな子たちは結構いたりします。

ここ、もうパーって飛ばすんですけど1個さっきの話の中で出てきたところで言うと親のことを話したらばれ、親のことを話したのがばれたら地獄が待ってるみたいなところ勝手に自分が話したら、勝手にそこから家庭に介入される怖さみたいな感じで子たちはかなりいるっていうところで、やっぱ家族丸ごとってすごく大事だと思うんですけど、やっぱりその親から子供に繋がる家族丸ごと子から親に繋がる家族丸ごとってリスクとあってやっぱ全然違う。

同じ家族丸ごと全然違うのかなっていうふうにもやっぱりすごく思っているっていうところはあります罪悪感の話はやっぱりすごい出て今この時期とか特に進学就職で家を離れる選択肢をする子たちの相談に結構乗ったりするっていう感じです。



なんかやっぱり共通してるのは孤独感みたいなのところかなっていうふうに思っていてこれはもう本当にほぼ全員の当事者の子たちから孤独だっていう話は聞いたりします。ここもすごく大事なかなというふうに思うんですけど居場所と支援のニーズって全然違うなっていうふうに思っていて、何か次のスライドも行っちゃうんですけど、居場所と支援は別物だっていうところは僕たちは今活動してる中で強く思っています。

やっぱり支援を前提とした居場所になること、状況改善を目的のあって当事者の子たちが安心して過ごすことだったり、声を上げることっていう安心して思っていることを伝えるっていうことが難しくなっちゃうみたいなりスクとかあったりするからこそ、今居場所と支援ってすごく一緒にされてしまいがちだと思うんですけど、やっぱりそこを分けて考えるっていうこともすごく大事なんじゃないかっていうふうに思っています。

最近精神疾患の親とかヤングケアラーの話が出たときに、親とかケアを受ける人が悪いみたいなことを聞くことが多いんですけど、そうではないって絶対僕は僕はそうではないって声を大にして言いたいし、あとヤングケアラーはケアの外部化をする必要があるっていう話もやっぱりよく聞くけれども、必ずしもそうではないっていうところやっぱりさっき斎藤先生の話とかでもあったと思うんですけど、それがその子にとっての何か生きる中での大きな意味になってしまっている。

それは客観的に見ていいか悪いかっていうところとは別にその子の人生にとってはすごく大事なことであって、外から見たその正義とか正しさによって勝手に判断して、ケアを外部化してあげるからあなたは自分の人生を生きなさいってされても困惑してしまう子供たちかなりいると思うんですよね。

やっぱりそこは当事者の子供関係性を作って声を聞きながらやっていくことはすごく大事なんじゃないかっていうところは思っています。本当にもう多様な考え方とか捉え方があったりするっていうところは知っていただけたらすごく嬉しいなというふうに思っています。

あと3分ぐらいでバーッといくんですけど、もう本当にすごく難しいなと思うところではあるんですけどさっき斎藤先生がかわいそうな子供って言葉も出たと思うんですけど、やっぱりどうしてもすごい子供ってかわいいなんていうかね、可哀想に見えてしまいがちなところもあったりすると思うんですけど、やっぱり助けてあげないっていう気持ちが強いあまりに本人が何を思って何を必要としているのかみたいなのところがどうしても無視されてしまいがちな無視っていうかちょっと強いっすね、すいません忘れられてしまいがちな

ていうところはやっぱりすごく感じていて、そういった経験って当事者の子たちにとっては声を奪ってしまうみたいなのところにやっぱり繋がるのかなっていうふうに思っていて、ただ前提として本当に僕と僕は結構そういう当事者の子たちと話してるかこうやって言うけれども支援者の人たちもこの子にとってどうしたらいいかみたいなことをすごい試行錯誤しながらやってくさっているってこと本当に前提としてあると思うので、だからこそケア営みの中で皆さんが子供のその目の前の子は何を思っているんだろうっていう問いを持つっていうことはその試行錯誤の中で1個プロセスとして入ってくるとすごくより良い支援に繋がっていくんじゃないかっていうところを持っています。

ここもすごく大事な事かなと思うんですけどさっき唐揚げとハンバーグの話とかもそうだと思うんですけど、精神疾患の親を持つ子供とかヤングケアラーってやっぱり人のことを優先してる子とか人っていうかケアのをする相手だったりとか親だったりとかを優先して生きてる子とかがやっぱり多かったりするんで、やっぱり自分の声を発することが苦手な傾向ってのはすごくあるのかなっていうふうに思っています。

やっぱりその場に呼んで声を聞いたっていうのって、やっぱり何かそれって声を聞いたではないと僕は思って、やっぱり彼ら彼女は支援者の顔を見て支援者喜ぶことを言うのはすごく上手いというふうに思っています。だからこそ、何か声を聞くってなったときに彼ら彼女らを直接的に呼ぶ必要があるのかって言われたら、僕はそうではないと思っていて、もちろんトレーニングを積んだ子たちが声を上げていくっていうこともすごく大事だと思うし、翻訳者が必要な声っていうのもやっぱりあると思う。

だからこそその翻訳者となるような存在っていうのもすごく大事になってくるんじゃないかなというふうに思っています。はいちょっとあの時間なんですけどもちょっと話させていただきます。本当にとにかく大事だと思うのは声を聞くことだったりとか日々の関わりだなんていうふうに思って、やっぱり同じ言葉でもうなんか人によって、もう関係性によってもやっぱりどういう捉え方をするかって変わってくると思う。

なんかすごい一歩踏み込んだようなお前それ言うかよみたいな声とかもうやっぱりなかなか関係性がある人だったらすごく受け入れやすかったりだったりとかもすると思うっていうところで、やっぱり日々の関わりとか、あの声を聞くことって大事なんじゃないかなってふうに思っています。ただやっぱりすごく簡単ではないことだと思うし、でもだからこそ地域センターもできると思うんですけどその地域の可能性ってすごく大きいなというふうに思っています。

もう本当に行事だったりとかその地域の日々の関わりの中で、何かあのおじちゃんめっちゃ優しいなみたいになってそしたらなんかあの人だったらちょっと困ったときに話してみてもいいかなみたいな存在が増えていくっていうことは、やっぱりとにかくすごい綺麗事にはなっちゃうんですけど、大事なんじゃないかなっていうふうに思っています。なんかすごい偉そうに言っちゃってる僕とかも、結局僕たちも待つ支援しか今できてないのでそこを打破するために今後動いていくんですけど、僕たちが今こうやって話してることも本当に一部の声でしかない。

僕たちも繋がれてる子たちは言ってこなかった子供自身とか若者自身の中で自身の状況を言語化して、かつ助けてって言った子たちって本当に一部の限られた当事者たちだというふうに思っています。だからこそ僕が話してることもやっぱり一定の、なんかあの語弊を恐れずに言うとやっぱり賢い当事者たちと出会っているというふうに思っていて、それにはすごく偏りがあるというふうに思っているのだからこれはあくまでも一部だっていうことは知ってほしいなというふうに思っています。

もう1個大事だなと思うのは、何か忘れ物とか宿題って最近ケアラーの議論で出てきたりするんで理解されやすいなと思うんですけど、何か非行とか問題行動になった瞬間すごい、怒るだけになってしまうというか、その背景にすごい虐待だったりとかヤングケアラーだったりとか精神疾患が家庭内がすごく難しい状況だったり、隠れてることってかなりあるのかなというふうに思っていてやっぱりそういった何かちょっと悪いなっていう行動があったときにその背景をやっぱり想像したりとか、その子ただ送るだけじゃなくてそういう関わりをするっていうことはすごく大事なんじゃないかっていうところは個人的には強く思っています。

その中で僕たちは多様なフェーズにいる当事者たちがオンライン上です、支援をできるように頑張りますっていうところと10年間めっちゃ大雑把なんですこういう形を考えて頑張りますというところです。最後に伝えたいのは精神疾患のある親を持つ子供若者支援充実っていうところ声を大にして言ってるんですけど、それは親の立場の方を悪にしたいってわけではなく、精神疾患のある方が安心して子供を望んで育てることができる社会にも繋がっていくんじゃないか。

精神疾患のある方は子供を望むとか育てること考えたときに何か頼れる先の一つだったりとかそういった選択肢が増えていくことなんじゃないかっていうふうに思っています。なんかすごく僕たち寄付型NPOなんで何か寄付集めとかマーケティングみたいなこと考えたら

対立、親が悪くて子供がかわいそうでっていう対立を作ったらすごく合理的だと思うんですけど、でもそれって社会、この子の大きな社会課題を解決していくにあたって非合理的で、その対立構造ができればできるほど親のことを悪く言われたくない子供と、相談した自分に悪い親っていうレッテルが貼られてしまうかもしれない。

親の相談のしづらさっていうのがどんどん大きくなっていくだけで、他でもその支援団体にお金が集まっていくっていう良くない構造になっていくと思うんですけど、だからこそやっぱり対立構造を作らずに、しっかりとどっちにも寄り添ったあの形でこの課題解決を考えていくっていうことはすごく大事なんじゃないかなというふうに思っています。

はい話は以上になるんですけどもしよければ団体の SNS とかフォローしていただけたら嬉しいなというところともう 1 個寄付をお願いしますって話なっちゃうんですけど、僕たち僕たちが取り組んで親が精神疾患の子供若者支援っていう本当に公的なところが取り組むべきところだというふうに思って、ます。ただやっぱり公的なところって 01 がすごい苦手だというふうに思っていて税金とかを使ってるから説明責任があって難しい失敗ってなかなかしづらかったりとか意思決定プロセスがすごく複雑時間かかってしまうみたいなど 01 が苦手だと思うんですけど、だからこそ民間で 01、得意な 01 をしてでもスケールが難しいから、モデル事業として 1 から 10 をやってもらいたいなチャレンジをしていこうというふうに思っていますその中で本当皆さんからの応援というのはすごく大きな近いのもしよればご寄付とかでも応援していただけたら嬉しいなというふうに思っています。

本当に今日はありがとうございました。